NIAS

Nagasaki Institute of Applied Science

2006
MARCH

学　報

No.85

入試広報課　編集・発行

特集　卒業

長崎総合科学大学

URL　http://nias.jp

特集 卒業

平成17年度卒業式

平成17年度（2005年度）長崎総合科学大学卒業式、大学院学位記授与式並びに別科修了式が3月15日、本学体育館にて挙行され、大学院、工学部、人間環境学部並びに別科の322名が式に臨んだ。午前10時より始まった式では、最初に博士（工学）の学位記が廣田一博、清山浩司、星光の3氏に授与され、続いて修士（工学）の学位記、学部卒業証書、別科修了証書が各代表者に授与された。林一馬学長は式辞で「卒業あるいは修了するに当たり、来し方を振り返り、将来を展望することが大事。進学される人には「よく学び、よく遊べ」、就職される人には「よく働き、よく遊べ」と言う言葉をあえて送りたい」と激励した。佐仲琢也学生自治会委員長の祝辞の後、大学院、学部、別科の代表3名より答辞があり、大学院生代表の和田祐樹君（工学研究科修士課程流体工学専攻）は「地球環境と私たちの生活、両方をより良くするため、大学院において学んだ知識や経験を生かし、これからの困難を克服していきたい」、学部生代表の小林美幸さん（工学部建築学科）は「どんな時でも自分を見失うことなく、しっかりと地に足をつけ、一歩一歩、歩んでいきたい」と述べた。別科生代表の王宥娟（オウユウケン）さんは「別科の勉強は大変でしたが、日本の友人と四季折々の行事を楽しむことが出来てとてもよい思い出になりました。台湾で仕事が待っていますが、学んだ日本語を精一杯生かして頑張るつもりです」と流暢な日本語で挨拶。出席者から惜しみない拍手が送られた。

引き続き、学会・団体表彰が行われ、個人やグループ24名が11学会・3団体より表彰された。

[卒業生・修了生]

○卒業生数

工学部244名

船舶工学科23名、機械工学科74名、

電気電子情報工学科43名、建築学科68名、

経営システム工学科36名

人間環境学部46名　環境文化学科46名

○学位記授与者

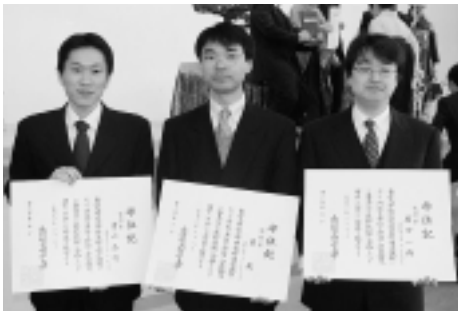
博士（工学）4名　総合システム工学専攻4名

修士（工学）13名

流体工学専攻1名、環境計画学専攻3名、

電子情報学専攻9名

○別科日本語研修課程修了者16名



学位記を授与された清山、星、廣田の3氏

[学会・団体表彰]

○大学院工学研究科

電子情報通信学会九州支部学術奨励賞

金　奉基（修士課程電子情報学専攻）

○工学部

船舶工学科　日本造船学会奨学褒賞

桑野修太朗、林田　翼、井上　直喜

機械工学科　日本機械学会畠山賞　伊藤　彰

溶接学会九州支部奨学賞

里見　大

電気電子情報工学科　電気学会九州支部支部長賞

牟田　高浩

電子情報通信学会九州支部長賞

當山　賢

建築学科　日本建築学会九州支部長賞

森中　星児

日本都市計画学会九州支部長賞

小林　美幸

都市住宅学会九州支部長賞

島田　育美、森　栄子

日本コンクリート工学協会九州支部長賞

千代留孝明

経営システム工学科　日本経営工学会優秀学生賞

布上めぐみ

日本経営工学会九州支部長賞

牛島　啓介、王　暁洋、小松　渉

柴本　亘、田端慎太郎、松尾　勝郎

長崎県中小企業団体中央会会長賞

河村　尊、土井添悠一、泊　初恵

○留学生

財団法人長崎県国際交流協会賞

GANEGODAGE, DARSHANA PRADEEP

（ガネゴダケダルシャナプラディープ、スリランカ出身）

[式　次　第]

第３回	長崎総合科学大学大学院博士課程	学位記授与式
第29回	長崎総合科学大学大学院修士課程	学位記授与式
第38回	長崎総合科学大学工学部	卒業式
第２回	長崎総合科学大学人間環境学部	卒業式
第27回	長崎総合科学大学別科日本語研修課程	修了式

日　時　平成18年３月15日㈬　10：00～11：00

場　所　長崎総合科学大学体育館

1	開　式	教務部長	藤原　豪
2	学位記授与	大学院工学研究科	
		博士課程総合システム工学専攻	
		廣田　一博、清山　浩司、星　光	
		修士課程	
		流体工学専攻代表	和田　祐樹
		環境計画学専攻代表	夏　立男
		電子情報学専攻代表	宋　培松
3	卒業証書授与	工学部	
		船舶工学科代表	井上　直喜
		機械工学科代表	松崎　俊介
		電気電子情報工学科代表	李　淋
		建築学科代表	元木　貴大
		経営システム工学科代表	天木敬一郎
		人間環境学部	
		環境文化学科代表	喜多　慎一
4	修了証書授与	別科日本語研修課程代表	馬　傑
5	学長式辞	学　長	林　一馬
6	在学生代表祝辞	学生自治会委員長	佐仲　琢也
7	祝辞披露	教務部長	藤原　豪
8	答　辞	大学院生代表	和田　祐樹
		（工学研究科修士課程流体工学専攻）	
		学部生代表	小林　美幸
		（工学部建築学科）	
		別科生代表	王　宥娟
9	閉　式	教務部長	藤原　豪

学長式辞

皆さん、ご卒業、学位記授与あるいは修了おめでとうございます。また、御列席の御父母の皆様にはご子息並びにご息女のご卒業、心からお祝い申し上げたいと思います。さて、皆さんは卒業、学位記授与あるいは修了という晴れの日を迎えられました。所定の単位を修得するばかりか、学部生にあっては卒業研究、大学院生にあっては修士論文や博士論文をそれぞれ完成させ、それが十分適格だと認められたからこそ、こうしてここに皆さんが集っていらっしゃる。それはまさに皆さんひとりひとりの努力の賜物だと思います。それと同時に皆さんを今まで支えてくださった御父母の皆さん、あるいは御指導くださった先生方、そのご支援や指導がなければ達成できなかったはずであります。ですから皆さんは、ご自身を誉めると同時に感謝と御礼の気持ちをこの際改めて持っていただきたいと思います。

ところでこのような卒業、学位記授与あるいは修了という晴れの日、重要な節目でもあるこの日を迎えて、皆さんはいった い何をしようとしますか。私はこう言う時には、来し方を振り返り、未来を展望するということがとても大切ではないかと思います。ちょっと思い出してください。楽しかったこと、苦しかったこと、あるいは悲しかったこともあったかも知れません。あるいは４月以降の就職に向けた希望や不安がよぎるかも知れません。しかし、いま言おうとしているのはそういう断片的な回顧や展望ではなく、むしろ何かの基準、尺度といったものに基づいて回想し展望するということが大変大事ではないかと思います。尺度はいろいろあるでしょう。皆さんは小学生の頃から、多分、何度も何度も聞かされた言葉に「よく学び、よく遊べ」という言葉があると思います。これから見ますと、遊んでばかりいたり、あるいはアルバイトに精を出してどちらも中途半端だったかな。あるいは大学院生の場合は、勉強ばかりで遊ぶ時間がなかったかな。そのように思われるかも知れません。しかし、「よく学び、よく遊べ」とはそういう数量的なことでは実はないはずなんです。違う言葉で「よく生きる」という言葉があります。より良く生きる。この良くというのは、決して沢山という意味ではない。これから見ますと「よく学び、よく遊べ」というのは、判りますね。「よく学び」というのは時間を掛けて沢山勉強するということではない。「よく遊べ」も同じです。むしろ、ちゃんとまともな勉強をしたのか、まともな遊

びをしたのか、寝ながらテレビばっかり見ている、あるいは毎日毎日メールばっかりしている、それは遊びではない。あるいはクラブ活動、サークルあるいは趣味において十分にそのことを徹底された人もいるかも知れません。交遊関係という言葉がありますように、「遊ぶ」とは人と遊ぶ、交わる、友だちを作ったか、友だち付き合いをしたか、これが問われているのです。このように考えますと「よく学び、よく遊べ」というのは、決して小学校や中学校だけの話しではない。大学院に至るまでのすべての学生生活において、要は学生として生きる、そのことのいわば指標であるはずです。このことを今一度、噛み締めていただきたいと思います。

さて、一部の人は進学されるでしょう。大半の人は就職されます。進学される人には今一度、「よく学び、よく遊べ」という言葉を贈りたい。さきほどのような意味においてであります。同時に「論語」のなかに「学びて思わざれば則ち罔（くら）し、思いて学ばざれば則ち殆（あやう）し」という言葉があります。これは学問研究のもっとも基本的な態度のことを言っている。この場合の「学ぶ」とは先ほどの「学ぶ」よりは若干意味が狭い。「学ぶ」とは真似る。先学や先人の研究について真似る。それを勉強し、学習する。しかしそれだけでは、自分の頭で考えない限りまだ暗い、明るくない。一方、自分の頭だけで思う、思いをめぐらす。これも大切なのですが、同時に先学の研究に照らして、自分がどこにいるかを考えなければなりません。両方が要るということです。

就職される方には、先ほどの言葉をもじって「よく働き、よく遊べ」と言いたい。「仕事をする」、これは一面で生活の糧を得る、生活費を稼ぐという意味がございますけれども、果たして人間は、仕事をしたり、働いたりすることなしに人間として生きていけるかどうか、「学ぶ」ということは学生時代において大切なことであります。同じように「働く」というのは、実は一生掛かって大半の人は働かざるを得ないのではなくて、働くことを通じて自分の自己形成、人間としての存在意義を獲得していくのではないでしょうか。果たして「仕事」なくして人間は生きていけるかどうか考えていただきたいと思います。

時代はまさに激動です。どんどん変わります。コンピュータの世界では、年に2倍の速度で進歩していると言われています。10年経ちますと2の10乗ですから、1000倍を超えるはずです。それぐらい激しい時代に皆さんは生きて行きます。俳人、松尾芭蕉の言葉に「不易流行」（ふえきりゅうこう）という有名な言葉があります。「不易」とは変わらざるもの、永遠なるものです。一方、「流行」とはどんどん移り変わるもの、新味、新風を取り入れるということです。永遠性と新しさの双方が大切であり、新しみを取り入れなければ良い俳句ではないと松尾芭蕉は言っています。同じことだと思います。生きて行くことにおいて、永遠を目指すと同時に、常に時代の新しい風にも触れていく、その両面が要ると思います。より良き人生を求めて、「不易」と「流行」を意識して新しいことに挑戦してほしいと思います。卒業式に当たり、この言葉を皆さんに贈り、式辞とさせていただきます。

学生自治会委員長祝辞

本日、長崎総合科学大学を卒業される皆さん、御卒業おめでとうございます。在校生を代表致しまして、心よりお祝いの言葉を贈らせて頂きます。先輩方の在学中、私たちは学業サークル、私生活に至るまで様々な面において御世話になりました。皆さんと接していく中で大人としての考え方、人と人との繋がり、チームワークの大切さなど、教科書では教えてもらえない事を数多く学びました。この貴重な経験、想い出を心の支えにして、この長崎総合科学大学をより発展させるように頑張りたいと思います。先輩方はこれから自分の夢に向けて歩き出そうとしています。この先、今まで味わったことのない苦労や、辛い事、うまくいかない事も多々あると思います。そんな時は、この大学で一緒に過ごした仲間や先生達との楽しい一時などを思い出してみてください。きっと皆さんならどんな困難も無事に乗り越えられると思います。そしてもし暇な時があれば、僕ら後輩を見に来てください。皆さんのように良い先輩になれるように必死で頑張っていると思います。それでは最後になりましたが、今後の先輩方の御健康と御活躍をお祈り致しまして御祝いの言葉とさせて頂きます。

平成18年3月15日
長崎総合科学大学
学生自治会執行委員会　委員長
佐仲　琢也

答辞

大学院生代表

本日は、私たち卒業生、修了生のために、学長をはじめ諸先生方、並びにご来賓の方々の御臨席をいただき厚く御礼申し上げます。また、お祝いの言葉を賜りまして、誠にありがとうございます。今日の日を迎えられたことは、私たちにとりましてもこの上ない喜びです。振り返ってみますと、より深い研究を求め大学院に入学して2年、専門知識のみならず、これから社会に出る人間として、必要なことを数多く学ぶことができ、大変充実した時間を過ごす事ができました。なかでも、研究活動の中、先生や友人、後輩との意見のやり取りを通じて、人とのふれあいの大切さや、自分の意見を的確に伝える事の難しさや、自ら問題を解決していくことの重要性を学びました。現在、科学技術は飛躍的に進歩し、私たちの生活は今までになく豊かなものになりましたが、その代償として、地球環境を破壊し、汚染を広げたことで深刻な問題となっています。今後は、地球環境と私たちの生活、両方をより良くしていかなければなりません。そのため私たちひとりひとりが、それぞれの道で大学院において学んだ知識や経験を生かし、これからの困難を克服していきたいと思います。最後になりましたが、私たちを今日まで温かく見守ってくれた両親に感謝の意を表すとともに、熱心にご指導をくださいました学長をはじめとする諸先生方、様々な形で支えてくださいました職員の皆様に、心より御礼申し上げます。在校生のご健闘とご活躍を祈ると共に、母校のより一層の発展を願って答辞とさせていただきます。

平成18年3月15日

学部生代表

長崎総合科学大学
大学院第29回修了生代表
和田　祐樹

桜が芽吹きはじめたこのやわらかな季節に今日という日を迎えることができ、とてもうれしく思います。本日は、学長はじめ諸先生方並びに御父母、御来賓の皆様の御臨席の下、盛大に卒業式を挙行していただき、卒業生一同心から感謝しております。見慣れた学び舎、共に過ごしてきた友人や、お世話になった先生方、こうして顔を見合わせることができるのも今日で最後なのだと思うと、万感の想いがこみ上げてきます。私たちが過ごしたこの4年間は、長い人生の中では短い時間なのかも知れません。しかし、この時間ここにいるみんなと共に過ごし、大学生活のなかで改めて自分自身と向き合うことにより、手探りながらも今迄にない新しい自分やこれからの自分の方向性、可能性、目標を見い出すことができたこの4年間は、私にとってかけがえのないものとなりました。楽しかったことも辛かったことも、諸先生方の助言や友人、先輩方の励ましがあったからこそ乗り越えていくことができました。これらの経験全てが明日からの私たちの力となるに違いありません。これから、私たちはそれぞれ社会に、大学院へと新たな大きな世界へ向かって羽ばたきます。そこには多くの困難と忙しい毎日が待ち受けていることでしょう。世界は、中国の急速な経済成長や混迷を深めるイラク情勢、鳥インフルエンザや核問題など日々変化し目が離せません。また、国内でも日銀の量的緩和政策の解除や経済の一部好転がいわれる一方、少子高齢社会、年金問題など暮らしの形が問われる問題も多く抱えています。しかし、困難な現状を直視し、未来を切り拓くのは私たち自身なのです。しっかりとした目標と強い意志があれば必ず明るい未来が開けると信じています。「忙」（いそがしい）という字は「心」を「亡くす」と書きます。しかし、忙しいときにこそ心を亡くすことなく、一歩立ち止まり、周りをよく見つめることが大切なのだと思います。どんな時でも自分を見失うことなく、しっかりと地に足をつけ、一歩一歩、歩んでいきたいと思います。そして、本学で学んだ学問はもちろんのこと、人間として心に刻んだ事柄を糧として躍進していく所存でございます。学長をはじめ御指導、御鞭撻いただきました諸先生方、ご親切にしていただきました職員の方々、そしてずっと温かく見守って下さいました御父母の皆様に心より御礼を申し上げ、今後も変わらぬ御支援をお願い申し上げます。最後に、わが長崎総合科学大学のさらなる飛躍を心から祈念し、答辞とさせていただきます。

平成18年3月15日
長崎総合科学大学卒業生代表
工学部建築学科
小林　美幸

別科生代表

２００５年度別科修了生を代表してこの1年の感想とお礼を申し上げたいと思います。

私は去年の3月31日に日本へ来ました。台湾を出発して、福岡から長崎に着いたときは深夜でした。乗客が3人しかいないバスで暗い長崎駅前のターミナルに着きました。そこで、別科の先生と初めて会って、ほっとしたのを昨日のことのように思い出します。別科の授業は大変でしたが、私はいろいろな活動にも参加しました。先生の紹介で学部の日本人学生の友人もできました。その友だちを通して、日本の文化を理解し、体験することができました。私はお祭りが大好きです。春の帆船祭り、夏の精霊流し、秋のおくんちや若宮稲荷神社の竹ん芸、冬のランタン・フェスティバルなど全部参加しました。「大晦日」には友だちの家で「年越しそば」を食べて、矢上神社へ行って除夜の鐘を突きました。お正月の2日には、友だちと着物を着て、諏訪神社へ初詣に行きました。また、節分には自分の部屋で、南南東の方を向いて、エレナで買った「恵方巻き」を無言で食べて、願をかけました。その夜は矢上神社の豆まきにも参加しました。拾った豆の中には「くじ」が入っていて、賞品のミカンをもらいました。このように私は日本の友人と四季折々の行事を楽しむことができて、とてもいい思い出になりました。もちろん留学生活は楽しいことばかりではありません。一度ひどい風邪をひいて、不安と寂しさに辛い気持ちになったことがあります。でも別科のクラスメートが「電気毛布」「薬」「お粥」「アイス・クリーム」「手紙」といろいろな物を持って次々にきてくれたのです。本当に感動しました。今年の別科生は台湾の学生の他に、中国、韓国、ベトナムの学生もいます。皆さんは私より若いですから、私を「お姉さん」と呼んでいます。若い別科生は「大人」の考えが知りたくて、困ったときには私の意見を求めてきました。これは、ちょっと恥ずかしいですが、「お姉さん」としての存在価値があったかなと思っています。別科の皆さんはこれから、ほとんどが日本の大学に入って、自分の専門を究めることになります。私は、休職してきた台湾の仕事が待っていますが、学んだ日本語を精一杯生かして頑張るつもりです。先生方、事務の方々いろいろと御世話になりました。心からありがとうございましたと申し上げます。別科の生活も今日が最後です。私には短い1年でしたが、皆さんと一緒に楽しい日々を過ごせてよかったです。別れがあれば、また次の出会いもあります。私はまた皆さんと会う日が来るのを楽しみにしています。皆様に輝かしい未来が来ることを心より祈っております。

２００６年3月15日
別科日本語研修課程修了生代表
王　宥娟

別科日本語研修課程修了者

平成17年度附属高等学校卒業式

亀井守正校長より卒業証書を受け取る松永拓也君

平成17年度長崎総合科学大学附属高等学校の卒業式が3月1日、本学体育館において挙行され、160名の生徒が思い出を胸に学び舎を巣立っていった。3年の各クラス担任より卒業生一人ひとりの名前が呼ばれた後、卒業生を代表して3年3組の松永拓也君が亀井守正校長より卒業証書を受け取った。亀井校長は式辞のなかで「第42回生（今年度卒業生）は、新教育課程の第一期生で、生きる力を身につけた、主体的で、創造性のある、心豊かで、たくましい人間の育成を目指して編成された新しい教育のパイオニアとしての役割を担わされた。全体的に素直で真剣に学校教育活動に取り組んでくれた。特に、先生方、仲間の生徒との人間関係を大切にしてくれたのが、印象に残っている。純白に輝く、明るい人生を祈らずにはいられない。皆さんが飛び立とうとしている現代社会は、決して生易しいものではないが、これからも身近な人間関係、毎日の生活を大切に、誠心誠意生きてほしい。」と激励した。角眞治育友会長からの祝辞の後、在校生を代表して佐々木あゆみさん（2年5組）が「先輩方が自らの力で夢を実現することを信じ、応援していきます。どんなときも独りではなく、周りで多くの仲間が支えてくれていることを決して忘れないでください」と送辞を述べた。卒業生を代表して西野俊祐君（3年5組）が「先生方や友人との出会いはもちろんのこと、これから出会う人達との出会いが、自分ではまだ気がついていない何か潜在的な能力を引き出してくれるかも知れません。何事においても自分でしっかりと考え、持っている新たな能力を発揮できるよう努力していきます」と力強く答辞を述べた。卒業生への記念品が亀井校長より卒業生代表の深堀優紀さん（3年4組）へ、卒業生から学校への記念品（目録・テント一式）が池田健大君（3年1組）より亀井校長へ手渡された後、皆勤者16名、精勤者12名の表彰があり、代表して久保彰志郎君（3年2組）が亀井校長より記念品を受け取り、出席者全員から盛大な拍手が送られた。最後に、蛍の光、校歌を斉唱し、先生方が会場出口で大きな拍手で見送る中、卒業生は会場を後にした。

答辞を述べる西野俊祐君

［式　次　第］

第42回卒業式

開式の辞	教頭	浦	一俊
卒業証書授与	代表	松永	拓也
校長式辞	校長	亀井	守正
来賓祝辞	育友会長	角	眞治
送辞	2年5組	佐々木あゆみ	
答辞	代表	西野	俊祐
記念品授与	代表	深堀	優紀
記念品贈呈	代表	池田	健大
皆勤者・精勤者表彰	代表	久保彰志郎	
「蛍の光」斉唱			全員
校歌斉唱			全員
閉式の辞	教頭	浦	一俊

合同企業面談会「キャリアへの第一歩」開催

学生の就職支援を目的に毎年開催している本学主催の「合同企業面談会（キャリアへの第一歩）」が2月13日、全国より121社を招いてホテルニュー長崎にて開催された。今年で7回目。

この時期、就職活動が本格化する3年生を対象に、就職意識の向上と企業との出会いの場を提供するため学内の体育館で開催していたが、毎年参加企業数が増加、今年は会場を学外に移しての開催となった。今回は主に平成19年3月卒業見込者（現3年生）が対象。景気の好況感や団塊世代の大量退職を控えたいわゆる2007年問題等を背景に、企業の採用意欲も活発化し、全国より200社以上の企業より参加希望があり、過去最高の121社が参加した。本学からも300名以上の学生が出席し、参加した学生たちは真剣な表情で企業との面談に臨んでいた。この面談会をきっかけに毎年多くの学生が、参加企業へ内定・入社しており、大学ではこの面談会をまさに学生の「キャリアへの第一歩」と位置づけ、就職・キャリア形成支援に力を注いでいる。

企業の担当者には本学卒業生も多く、後輩への温かいアドバイスも
写真左は、本学工学部ＯＢの本坊興一氏

全国より121社が参加した合同企業面談会

3年生対象「マナー講座」開催

学部3年生を対象とした「マナー講座」が1月13日、3号館大講義室において開催され、約150名の学生が出席した。本学で実施している学生のキャリア形成を視野に入れた授業科目「将来計画フォーラム」で実施されたもの。当日は、長崎労働局の職業講話派遣講師の鈴木真由美氏より、「選ばれる人になるために～一緒に働きたいと思わせるマナー～」と題して約1時間の講演があり、学生は挨拶や職場の基本用語、ビジネス電話のマナーなどこれから迎える就職活動や社会人としてのマナーを学んだ。

鈴木真由美氏の講演

模擬面接会を実施

人間環境学部では就職活動を目前に控えた3年生を対象に、企業人事担当者を招いての模擬面接会を12月13日、シーサイドキャンパスにおいて実施した。学生のキャリア形成を視野に入れた授業科目「将来計画フォーラム」のなかの学部・学科別フォーラムの一環として実施されたもので、約40名の学生が参加。株式会社山武より人事採用担当者を招き、学生は午前と午後に分かれて、2人1組で本番さながらの面接練習に臨んだ。参加した学生からは「良いアドバイスをいただけた」、「緊張したが、貴重な経験になった」などの声が聞かれ、好評だった。

模擬面接の様子

EUC2005（組み込み計算とユビキタス国際会議）開催

EUC 2005 (IFIP 組み込み計算とユビキタス国際会議，The 2005 IFIP International Conference on Embedded and Ubiquitous Computing)が12月６日から12月９日まで、長崎ブリックホールにて開催された。本学とIFIP（国際情報処理連盟）の主催。アジアをはじめ、北米、ヨーロッパ、オセアニアなど世界各国より大学の研究者、産業界・行政の技術者約250名が参加し、組み込み計算、ユビキタス装置に関する学術論文約250件の発表が行われた。

基調講演では、Niraj K.Jha (Prof. Princeton University,USA), Edwin H-M Sha (Prof. University of Texas at Dallas,USA)，淺川和雄（株式会社富士通研究所フェロー）３氏より、組み込み計算とユビキタス装置の中のナノ技術、並列組み込み計算システム、ユビキタス情報装置の進歩に関して講演があり、意見交換が行われた。懇親会では、龍おどりが披露され、参加者の多くは海外との関わりが深い長崎の街の歴史に関心を寄せながらも、持参した‘デジタルカメラ’のシャッターを盛んに押していた。EUC 2005においては、本学学生27名（留学生含む）が大活躍。会場設営はもとより、登録受付、総合案内、会議進行、インターネットサービスなどありとあらゆる場面でその力を遺憾なく発揮し、EUC 2005運営委員会委員長よりその活躍ぶりに対して賞賛の言葉をいただいた。次回、EUC 2006はソウル（韓国）にて開催予定。

オープニングセレモニー

研究発表の様子

バンケットでは龍おどりが披露された

燃料電池の電極に関する新技術を開発

山邊時雄新技術創成研究所長と奥村典男工学部電気電子情報工学科教授は、燃料電池の電極に使用する白金の量を大幅に削減する新技術を開発した。従来は電極全面を白金を含むペーストで塗っていたものを、ペーストをドット状に電極に印刷する。この新技術では、ペーストの使用量が従来の半分となり、発電可能な電力は、従来とほぼ同じ水準を確保できる。価格の高い白金の使用量を削減し燃料電池の低価格化につながる期待が膨らんでいる。この内容は、２００６年１月27日付の日経新聞においても紹介された。

平成17年度知的財産セミナー開催

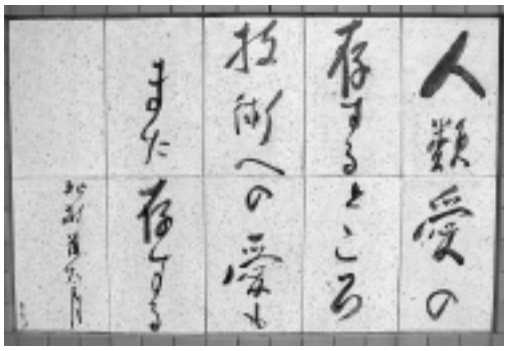
平成17年度知的財産セミナー（主催　特許庁・九州経済産業局・長崎総合科学大学、協力　日本弁理士会）が12月22日、本学グリーンヒルキャンパス３号館５階視聴覚室で開催され大学教職員及び学生等関係者約30名が出席した。このセミナーは大学における研究成果を「特許」として権利化して保有することが、産業振興に係る社会的活用への第一歩であること（特許権という防衛手段（排他権）の存在なくしては、企業は安心して投資できない。）から、大学の研究者および関係者を対象に、特許出願に関する基本的知識の習得を図ることを目的として開催されたもの。当日は午後２時より吉村進本学常務理事の挨拶の後、「特許出願と明細書の構成・書き方について」と題して弁理士の荒木憲一氏（荒木特許商標事務所）の講演があった。講演では特許になる発明や特許手続きの方法等について説明があり、講演後、質疑・個別相談が実施された。

知的財産セミナーの様子

「建学の精神」の改新と「大学の理念」の創定について

本学園の「建学の精神」は、昭和17年本学の創設者川南工業株式会社川南豊作社長によって発表された「川南高等造船学校創立趣意書」に由来するところであります。その設立意図は当時国家の存亡をかけた戦時の国策遂行のための造船技術者の養成にありましたが、同時にそこに示された理念はより普遍的な人間尊重の大意と教育・研究開発への熱情に充ちたものでありました。具体的には、1. 自己の確立、2. ものつくりとしての実行力、3. ものまねでない新技術の開発力、4. 世界的視野の保持等を説き示すもので、これらは今日的な観点からしてもなお指標としての意義と輝きを失うものではありません。

その後、敗戦のときからようやく60年を経て、その間に本学も短期大学への移行、４年制大学への昇格、学部・学科・大学院の増設・改編と校名変更、付置研究所及び附属高校の設置等をともなって、長崎総合科学大学として発展して参りました。しかし他方、科学技術の不断の進展と革新、高度情報化社会への推移、地球的規模での環境問題の増大、少子・高齢化社会の到来、経済的環境の変遷など大きな時代背景の変化変容の中にある学園経営は、少数適正な規模の堅持を図りながら、教育・研究のさらなる質的向上・充実をめざすべく、まさに「止揚」の時にあると考えられます。



元理事　北村徳太郎　筆（体育館入口）

そこでその第一歩として本理事会は、戦後60年、４年制大学への移行40周年の節目に当たり、以上を踏まえて改めて本学の「建学の精神」の表現の現代化をこころみると共に、併せて「大学の理念」を掲示し、その周知を図ろうとするものであります。すなわち上記創立趣意書にみられた先駆的な思念を「建学の精神」として下掲の４つの四字成語に要約改新し、また「大学の理念」としては本学の歴史的な歩みの中で伝承されてきた古代ギリシャの先哲ヒポクラテスの言葉をここにあらためて師表として掲げるものであります。

建学の精神　**自立自彊、実学実践、創意創新、宇内和親**

大学の理念　**人類愛の存するところ技術への愛もまた存する**

平成17年11月12日　学校法人　長崎総合科学大学

本学人間環境学部特任教授で日本居住福祉学会会長の早川和男氏の連載記事が、昨年７月から10月にかけて新聞各紙にて掲載された。タイトルは「地域の宝もの－居住福祉発見の旅－」。福島民報、埼玉新聞、神戸新聞、中国新聞、四国新聞などで全15回にわたって紹介された。

掲載された内容は「居住福祉資源発見の旅」として、３月25日に東信堂より出版されている（定価700円）。

トピックス

TOPICS

TOPICS ❶ 第3回産ニーズ対応型 産学官連環交流・講演会開催

本学並びにNPO法人長崎県科学・産業技術推進機構主催による第3回産ニーズ対応型産学官連環交流・講演会「長崎県新産業技術の創生に向けて」が2月24日、ウェルシティ長崎にて開催された。産業界側からニーズを学・官（聴き手）に投げかけ、学・官側が受け止めることで、連携テーマの絞込み、具体的活動の迅速化、成果の確実化をはかることを目的としたもの。小柳光正東北大学大学院工学研究科教授・本学客員教授より「異分野融合を目指す新しいシステム・デバイス技術」、森重之長崎県工業技術センター所長より「開かれた頼りになる工業技術センターを目指して」と題して特別講演があり、続いて松重和美京都大学副学長・国際イノベーション機構長より「大学からのイノベーション」と題して、次世代産業の誘起の原動力となる人材育成が大事である旨基調講演があった。その後、企業より産ニーズ対応型産学官連環活動報告、産業技術評価委員会の報告、産ニーズ発表会及びマッチング交流会が実施された。

■NPO法人長崎県科学・産業技術推進機構
http://www.npo-sunsui.jp/index.php

TOPICS ❷ 「フレッシュカレッジ」に本学も協力

平成17年度経済産業省地域産業活性化人材育成事業である「フレッシュカレッジ」のセミナーが2月から3月にかけて、本学で開催された。「フレッシュカレッジ」とは、長崎県内の若年者（34歳以下）を対象とし、新製造・情報関連・観光産業における地域産業活性化へ貢献できる人材育成を目的とした長崎商工会議所が主催する事業。

本学で開催されたのは、新製造分野の「機械制御技術の活用」「環境負荷低減技術」と情報産業分野の「オープンソースソフトウェア活用技術」「画像処理活用技術」「システム構築技術」の5つのセミナー。講習会場の提供に加え、新製造分野においては、本学も講師を派遣するなど地域の人材育成に協力。本学からも春休み期間を利用し多くの学生が受講した。

奥村教授によるセミナーの様子

TOPICS ❸ 森林ボランティアグループ「森いくぞう会」の活動に学生が参加

人間環境学部の繁宮悠介講師と学生3名が1月21日、「一緒に森へいきたいぞう!!」を合い言葉に間伐作業を中心に森林整備活動をしている「森いくぞう会（事務局長崎県農村整備課内）」のヒノキ林間伐ボランティアに参加し、その模様がNBCテレビ「あっ！ぷる」にて紹介された。資金や技術的な面で間伐作業がなされていない山林を自分たちのできる範囲で「本来の元気な山林に戻したい」という想いで始まったというこの活動、授業で森林管理を学んでいる学生にとっては貴重な実習の場。チェーンソーを初めて使っての伐採作業では「大変さが実感できた」「環境保全を口にするのは簡単だけど実行するのは重労働」など、すがすがしい面もちで語っていた。

TOPICS ❹ 発光ダイオード活用最前線 辻史郎工学部教授がNHKテレビで紹介

新技術創成研究所にて研究を進めている発光ダイオード（Light Emitting Diode）について、辻史郎工学部電気電子情報工学科教授が一般生活における活用状況をNHKテレビ「もってこい長崎5」にて紹介した。発光ダイオードとは、電流を流すと発光する化合物半導体のことで、省エネルギー、耐久性、鮮やかさ、発熱が少ないことがその主な特長。信号機、自動車、携帯電話などで使用されている。現在、辻研究室では発光ダイオードを利用した植物育成実験も行っており、美味しい〝いちご〟を作るのが目標とのこと。長崎総合科学大学産の〝いちご〟が出荷されるのもそう遠い話ではないかも知れない。

TOPICS ❺ 長崎市民エフエム「ワールドカフェテリア」に留学生が出演

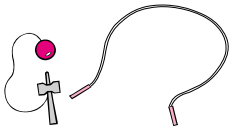
コミュニティ放送局長崎市民エフエム（76.7 MHz）の国際交流番組「ワールドカフェテリア」（毎週木曜日夜8時～9時、生放送）に12月8日、台湾からの留学生ワン・グレースさん（人間環境学部3年）が初出演した。留学生の目から見た長崎について、軽快な音楽を織り交ぜながらおしゃべりするこの番組、留学生が出演するのは月に2～3回の予定でこの日が第1回目。日本語が上手なのに驚くばかり。インタビューの様子が番組HPで公開されている。

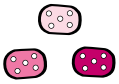
http://worldcafeteria.radilog.net/
http://www.nagasakifm.net/

TOPICS ❻ 留学生と日見小学校 3年生との交流会開催

本学留学生11名と長崎市立日見小学校3年生85名との交流会が2月15日、同小学校体育館で開催された。交流会は、総合的学習の一環として小学校側から本学に申し出があったもので、中国、台湾、韓国並びにマレーシアからの留学生が参加した。小学生の司会のもと、歓迎の挨拶、留学生の自己紹介、小学生から留学生へのインタビューがあり、その後グループに分かれて小学生と留学生が仲良く日本の遊びを楽しんだ。日本語、英語、韓国語、中国語による「キラキラ星」の合唱もあり、笑顔が絶えないとても楽しい雰囲気の中、お互いの交流を深めた。

日本の遊びを楽しむ留学生





TOPICS ❼ 長崎北陽台高校 理数科2年生76名が体験学習

長崎県立長崎北陽台高校理数科2年生76名が12月17日、本学で体験学習を実施した。理数科の特色ある教育活動の一環として、「本物」との出会いをスローガンに理学や工学の分野に関する講義・実習を受講する目的で長崎北陽台高校から申し入れがあったもの。当日は、グループに分かれ、本学が提供する4つのプログラムの中から、それぞれの実験・実習を選択受講。実習では本学学生もアシスタントとして高校生の学びをサポートした。生徒たちは、高校の授業では体験出来ない科学の先端技術に触れ、熱心に実習に取り組んでいた。

「実験・実習プログラムのテーマ」

①音波の活用、②これからのWebコンテンツ作成技術、③WebCGの制作、④データロガーを使った環境の測定

Webコンテンツ作成技術の実習

TOPICS ❽ 韓国・嶺南理工大学 金春中学長が来学

本学と交流協定を結んでいる韓国・嶺南理工大学（大邱広域市）の金春中学長が2月15日、表敬訪問のため本学を訪れた。来学されたのは金春中学長、姜賢求教授の両氏。林一馬学長、渡瀬一紀事務部長（情報学部知能情報学科教授）並びに奥村典男工学部電気電子情報工学科教授と教育研究のさらなる交流に関する協議を行った。その後、嶺南理工大学卒業の別科生4名にも会われ、和やかな雰囲気のなか日本での生活について歓談された。嶺南理工大学からは、毎年7月に夏季短期日本語研修生が来学している。

前列左が金春中嶺南理工大学長

TOPICS ❾ 古川重信附属高校教諭が 金子昇さんとNHKラジオで対談

古川重信附属高校教諭が俳優の金子昇さんとNHKラジオ第一放送「こんにちは！80ちゃんです」（月～土／午後0時30分～55分）で2月8日対談した。金子昇さんは、附属高校・工学部建築学科の卒業生。高校時代の恩師との対談という企画で、ランタンフェスティバルで賑わう長崎市・湊公園より地元長崎の魅力を語るとともに、古川教諭が高校時代の金子昇さんについて語った。

左から２人目が古川教諭

TOPICS ❿ 山本美術館オープン

橘湾を望む愛野展望台の一角に新版画、長崎古版画、浮世絵版画を中心に現代版画と現代陶芸を集めた個人美術館「山本美術館」が1月29日、誕生した。代表は山本一三本学事務局次長、館長は次女の直希さん。小崎侃氏（版画家・長崎在住）の作品をはじめ、これまでこつこつと蒐集した江戸浮世絵版画、美人画、風景版画や十三代横石臥牛氏（臥牛窯）の陶器などが展示されている。「愛野展望所」バス停下車、徒歩1分。開館時間10：00～18：00、毎週月曜休館（休日の場合は翌日）、TEL 0957－36－3701 http://www.yamamoto-museum.com/

研究室を訪ねて

―平坂敏夫先生をたずねて―

桜のつぼみが膨らみ始めた3月のある日、情報学部経営情報学科の平坂敏夫先生をグリーンヒルキャンパス8号館の研究室に訪ねた。

巨大コンビナートが出現

8号館6階（最上階）の南側奥、窓からは牧島が網場湾に浮かぶように見え、背後には雲仙岳が望める。平坂先生は1944年横浜市磯子の生まれ。戦前までの磯子は、住宅地（別荘が多い）、海水浴場、海苔の養殖などで知られていたが、湾の埋め立てが始まった1959年頃から大きく姿を変え、かつて景勝地だった湾内に石油精製、造船、機械などの企業が進出し、一大工業地帯が出現した。それに伴う従業員の住まいを確保するため、内陸部に大規模団地の開発が進んだとのこと。

「高校・大学時代は日本の高度経済成長期の真っ只中。企業がどんどんものを作り、それが次々と売れていった。自宅の周りの景色も年とともに変わり、ついには巨大なコンビナートが出現。驚いた反面、化学への興味が自然と湧き、大学では化学工学を専攻した。それでも海への愛着はあり、大学でヨット部に所属して毎日のように横浜港でヨットの練習に励んでいましたよ」と懐かしそうに話してくれた。

リバースエンジニアリング

1969年に大学を卒業後、花王石鹸（現在、花王）に入社。初任給は3万円。最初の仕事は、プラントに関するリバースエンジニアリング（Reverse engineering）。既存のプラントの運転データから、プラントと各機器の状態を化学工学的に解析する。それを設計値と比較検討して、現プラントの改善又は新プラント建設時の重要な設計データとして使用する。硫酸化反応器の開発、九州工場（洗剤製造設備）の建設に従事。九州工場建設は、リバースエンジニアリングの手法から当時としては最新の工場が稼動した。その後、マレーシアでパーム油の精製・分別設備のプロジェクトに参加。スペインでは新工場の建設を担当すると共に、収益の改善、在庫管理、生産管理、品質管理などを整備した。パーソナルケア事業本部生産技術部長、東京工場長を経て、1991年からシステム開発部門統括。1992年5月から1995年5月にかけて、情報システムの全社的再構築を推進した。

情報の力を活用する

企業では今日、情報通信技術を積極的に経営に導入し、業務効率化やコスト削減に活用している。平坂先生によると「情報の力を活用して、企業が目指すべきことは3つある」とのこと。

「一つは、業務と組織を革新すること。情報の力を使って、削除、結合、代替、簡素化の視点から仕事のあり方を見直すことで、要するに経営の革新をはかること。二つ目は、状況の変化を読んで先手を打つこと。リアルタイムな情報を入手し日々の経営活動を的確に把握することで、市場における変化の兆しをいち早くキャッチし他社に先駆けて有効な施策を講じることができる。三つ目は、組織の力を結集すること。情報の力によってコミュニケーションの革新をはかり、全社員の創造性を全社的に結集し、企業活動の原動力にするということ」だと言う。ただし、情報通信技術の投資が生産性上昇に顕著に結びついているのは、組織のフラット化や業務プロセスの改善等の企業組織改革に取り組んだ企業や、人材育成や人員の効率的活用等人的資本の充実に取り組んだ企業に限られているとのこと。要するに、企業経営における情報通信技術の導入の効果を享受するには企業組織改革や人材の充実等、積極的な経営改革が必要であり、そのためにも「大学は企業が喜ぶ人材を育成し、提供することが非常に大事である」と強調された。

平坂先生はこれまでの経験を踏まえて、現在、「企業経営における情報利活用の変遷と今後の動向」についての研究論文を執筆中。

失敗を恐れず、挑戦しよう！

「ちょっと、おもしろいのがあるよ」と言われて見せていただいたのが、15年前のある大手情報通信関連企業の警句集。仕事中、身近におこった出来事を変わり川柳のように、五七五調で一句一句書かれている。その内容はすべてが大企業病にならないようにするための警句。いつの間にか世間知らずで保守的になり、変化を嫌う体質を打破するためには「失敗を恐れず、新しいものに挑戦する」ことが一番大事だそうだ。

「やる気のある者は、目が輝いているよ」と言ったことばに、実感がこもっていた。

平坂敏夫
情報学部経営情報学科教授
1944年横浜市生まれ。
1969年3月横浜国立大学工学部化学工学科卒業。
1969年4月花王石鹸株式会社入社
2002年6月花王株式会社執行役員事業部長兼花王クリーンアンドビューティ代表取締役社長
2005年1月本学工学部経営システム工学科教授
2005年4月本学情報学部経営情報学科教授
専攻分野は、経営情報工学、SCM（サプライチェーン・マネジメント）と経営革新、経営と情報の活用

表紙の紹介

卒業式風景
左上・卒業式会場
右上・シェスタ（体育館前広場）
左右下・本館前

編集後記

卒業式。今年も卒業生がそれぞれの思い出を胸に学び舎を巣立っていった。その顔は皆、笑顔、笑顔、笑顔。誇らしげな素敵な笑顔。とてもよい顔だった。学生が満ち足りた笑顔で社会に旅立っていく。これこそが大学の使命だと改めて感じた瞬間だった。（T）

卒業式の写真は、本学写真部の皆さんにご協力を頂いた。お天気に恵まれて撮る方も撮られる方も楽しそうだった。大きな夢に向かって頑張ってほしい。（H）

このQRコードで
本学携帯電話ホームページにアクセスできます